

# 第99回 マヒナスターズが愛した 「昭和の女性たち」

昨年8月、神楽坂の画廊で開催された「街並スケッチ展」に友人が出演しているのを、出かけたところ、展示作品の作者に「多摩幸子」の名前がありました。もしやと思い友人に尋ねたところ、昭和36年にマヒナスターズとともに『北上夜曲』を大ヒットさせた歌手、多摩幸子本人でした。

「マヒナと女性歌手」の相乗作用の関係は、当時24歳だった松尾和子と歌った昭和34年7月発売の『グッド・ナイト』から始まります。同年12月に発売された松尾との第2弾『誰よりも君を愛す』が翌35年の第2回レコード大賞を受賞したことで、マヒナと女性歌手との関係はますます深くなっていきます。

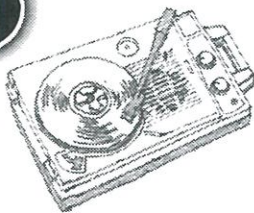
昭和36年に前述の『北上夜曲』で20歳の多摩を起用。翌37年4月には、映画スターとして注目され始めていた吉永小百合と組んで『寒い朝』を発売します。吉永はまだ17歳になったばかりの頃で、これがレコードデビューとなりまして。同年7月、ソ

ロで『草を刈る娘』を発売後、9月に橋幸夫と『いつでも夢を』をリリースすると、この年の第4回レコー

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵松本浦



ド大賞を受賞、青春歌謡を代表する名曲として歌い継がれていくことになりました。

翌38年には女優から転身した三沢あけみと組んで『ふられ上手』にほれ上手』『島のブルース』を吹き込みます。三沢はまだ18歳でしたが、色気がありすぎるとい理由でデビュー曲『ふられ上手』のほうは放送中止になります。『島のブルース』で昭和38年第5回レコード大賞新人賞を受賞します。

翌39年、マヒナは松尾和子との関係を復活させ、東京五輪直前の8月に発売した『お座敷小唄』が戦後最大級の爆発的な売り上げを記録します。この年の第6回レコード大賞では編曲賞を受賞、翌40年4月には二匹目のどじょうを狙い、持ち歌へのアンサーソングともいえる『続お座敷小唄』を同じコンビで発売しますが、さすがにこれはヒットしませんでした。

しかし、その2か月後にはシャンソン畑の田代美代子と組んだ『愛して愛して愛しちゃったのよ』が大ヒット



ト、年末の第7回レコード大賞で田代は新人賞を受賞します。そのとき彼女は22歳、昭和30年代後半、マヒナと組んだ若い女性歌手の成功確率は非常に高いものでした。

浜口庫之助・作詞作曲の『愛して愛して』ですが、昭和34年に『黄色いさくらんぼ』で一世を風靡したスリー・キャッツの中心メンバー小沢桂子が昭和38年に『愛しちゃったの』の曲名で発売、さらに成田綾子が三味線をバックに和風仕立ての愛唱で、カバーしていましたが、田代盤で「愛」を3文字盛り込んだタイトルに変更し、大ヒットにつながりました。師弟関係だった浜口と小沢の二人は、当時恋愛関係にあり、身内のラブソングだったようです。

その後、マヒナの人気下降もあってムードコーラスグループと女性歌手の組み合わせによるヒット曲は長らく途絶えることになりましたが、昭和54年にロス・インディオスがシルヴィアと組んだ『別れても好きな人』で甦ります。このときシルヴィアは21歳、昭和のマドモアゼルたちは今よりずっと大人でした。

ほりい・るくるう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。「私の『昭和 대중歌謡考』第4集 しあわせになろうね」(グスコ出版)が好評発売中